
インスタントラーメン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インスタントラーメン

【Nコード】

N1426Y

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

寮の男達とはにかく食いたくてそれぞれが持っているインスタントラーメンを鍋にぶち込んで食っている。すると意外にも。違う種類のインスタントラーメンを同時に一つの鍋に入れると意外といけたりします。

第一章

ラーメン

インスタント

八条大学の男子寮はとかくむさ苦しい。何処の男子寮も同じであるが。

部屋の中どころか廊下も便所も台所も何もかもが散らかり汚い。鼠やゴキブリが出てもおおかしくはなく夏になればすっぱい匂いや腐った匂いがしてくる。

そんなペストの発生源になってもおかしくない様な場所のある一室でだ。これまた何日も洗濯をしていないシャツにトランクスだけという男子寮ならではのラフな格好の男達が深刻な顔で車座になり向かい合っていた。

そしてだ。こう話し合うのだった。

「参ったな」

「ああ、ちよつとな」

「食うものはあるにしてもな」

「これ何だよ、一体」

「ばらばらじゃないか」

こうだ。難しい顔で言い合うのである。見ればだ。

彼等がそれぞれ出し合っているもの、それはだ。

カップラーメンだ。全部で四十はある。しかしどれもがだった。

「種類全部違うな」

「こんなのどうすればいいんだよ」

「何だ？誰がインスタントラーメン大会しようって言ったんだよ」

「カップラーメンばかりじゃねえかよ」

見れば袋のラーメンはない。見事なまでに全てカップ麺である。

そのラーメンを見てだ。彼等は言うのである。

「どうするよ。鍋に入れてそれでやるんだって？」

「カップ麺でか？」

「しかも種類全部違うじゃねえかよ」

「どれも種類違うって何なんだよ」

その四十はあるラーメンの。どれもだった。本当にそれぞれ種類が違う。メジャーなものもあればローカルなものもある。その中には。

カップうどんもあった。彼等はそれを見ても言い合う。

「これもそれだけなら美味いんだよな」

「ああ、これいいよな」

「けれど全部違うからな」

「ラーメンとうどんなんて一緒にならないだろ」

「どうするんだよ、本当に」

「野菜はあるぜ」

鍋に入れるだ。それはあった。もやしやらキャベツやら白菜はもう置かれている。しかも丁寧既に切られており後は鍋に入れるだけだ。

ついでに言えば鍋ももうあった。大きく頑丈そうな鍋がだ。彼等の脇に野菜と共にでんと置かれている。しかしそれでもなのだ。

肝心のラーメンだけがその有様だった。カップ麺ばかりだ。その状況でだ。彼等は困っていた。一体どうするべきかとだ。

しかしだ。その中でだった。中の一人が言った。

「まあこうなったらな」

「こうなったら？」

「どうするっていうんだよ」

「いいだろ。もうカップから出してな」

それでだというのだ。彼は。

「いっしょくたにして鍋に入れちまうか」

「おい、それまずいだろ」

「そうだよ。どうなんだよ」

その提案についてだ。周りはこぞってクレームをつける。

そうしてだ。こうその彼に言うのである。

「味減茶苦茶になるぞ」

「スープだけでなく麺の種類まで違うんだよ」

それこそ細かいものもあれば太いものもある。インスタントラーメンと一口に言っても本当にそれぞれだ。そのことは彼等もよくわかっている。

だからだ。その案にそれぞれ言うのである。

「駄目だろ、本当に」

「問題だろうに」

「どんな味になるんだよ、それじゃあ」

「おかしくなるに決まってる」

こう言っただ。否定する。しかしだ。

その彼はだ。あくまでこう言うのだった。

「まあそう言ってもな」

「入れるしかないか？カップから出してそれで鍋にまとめてぶち込んで」

まず麺をだというのだ。

「それでそこからスープ入れてな」

「で、野菜も入れてか」

「そうするんだな」

「ああ、そうするぞ」

こう言っただった。彼等は。

その案に頷きだ。カップの麺を開けていっただ。

それからだ。スープの封を切ってそれも入れていき野菜も入れる。そうしてだった。

「じゃあ食うか」

「全く。どんな味になるやら」

「美味しいのか？本当に」

「どんな味になるんだ」

「一体な」

こう話してだった。遂にそのラーメンを食べ始めるのだった。

第二章

箸に麺や野菜を取り椀の中にスープと共に入れてだ。そして食べる。

麺をすすりスープを飲む。すると。

「あれっ、この味」

「よくないか？」

「ああ、麺もスープもな」

「野菜もいいよな」

こう話すのだった。実際に食べてみてだ。

味はよかった。それもかなりだ。それを味わいだ。こう言うのだった。

「何か思ったよりも」

「美味いぜ、おい」

「味はかなりな」

「それぞれの味が絡みあつてな」

「いい感じだよ」

食べてみるとそうだった。それぞれの味の長所がミックスされてそれだ。

一種類では味わえない味があつた。その味を味わつてだ。

彼等はそれぞれ言うのだった。そしてだ。

箸は自然と進み瞬く間にだった。その四十はあつたラーメンも野菜もだ。全て食べ終えてしまった。食べ終えてからまた言うのだった。

「意外とよかつたな」

「だよな。最初はどうなるかと思って思ったけれどな」

「カップ麺も鍋に入れられるんだな」

「しかも混ぜてもいけるんだな」

「それぞれの味が出てな」

「よかったよな」

こう話し合うのあった。そしてだ。

中の一人、提案者とは別の人間がだ。こんなことを言い出した。

「またするか？」

「カップラーメンをそれぞれ入れてか？」

「それでか？」

「いや、袋麺でも何でもな」

そこはどうでもいいというのだ。彼はとにかくだというのだ。

「色々なラーメン入れてそれでな」

「またやるんだな」

「このラーメン鍋大会」

「ああ、どうだよそれ」

こう仲間達に提案する。

「悪くないだろ」

「確かにな。これな」

「案外以上に美味かったしな」

「またやってもいけるよな」

「カップうどんにしてもな」

その最も懸念されたそれについてもだった。

「混ぜてもいけたよな」

「揚げもいけたな」

「とにかく混ぜてそれでもいけたんだな」

「そうなんだな」

彼等もこのことがわかった。そうしてだった。

全員でだ。こんなことを話した。

「それじゃあもうとにかく何でも買って来て入れて作るか」

「ああ、ラーメンでもうどんでもな」

「チキンラーメンもいけるな」

「ただ焼きそばだけは駄目だな」

見れば最初からそれだけはなかった。流石にそれだけはだった。

しかしだ。その焼きそばについてもこう話される。

「けれど麺だけならいいか」

「そうだな。麺だけならあれもいけるな」

「じゃあ今度も何でもかんでも持って来て作るか」

「そうしような」

笑顔で言い合う彼等だった。最初はどうかと思ったがいざ食べてみるとだ。それはえも言われぬ美味だったからだ。何事もまずはやってみるということだろうか。少なくとも彼等は新しい味を知った。既存の味を混ぜ合わせてみてそこからできたその新しい味を。

インスタントラーメン 完

2011・9・27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1426y/>

インスタントラーメン

2011年11月2日02時05分発行